

上海日本人学校浦東校における研究授業と学年道德の実践

前上海日本人学校浦東校教諭

北海道札幌市立北陽中学校教諭 田上 有紀

キーワード：在外教育施設、上海日本人学校、小中併設、研究授業、学年道德

1. はじめに

上海日本人学校浦東校には小学部と中学部合わせて70名程の教員がいるが、学年・学部・年次の壁を取り払って互いに授業を公開し、より良い授業作りのために意見交換を行い、熱心に研修を重ねている。また、学校全体の研究授業とは別に、個人的に指導案を作成して配付し、授業を公開する先生方もおり、研修や研究に対する真剣さがうかがえる。

2. 学年道德を行うことになった経緯

(1) 「国際理解」の道德の授業

私は赴任1年目の6月、中学2年生の道德で、公開授業を行った。教科化される前だったこともあり、既存の読み物資料ではなく、自分自身が以前訪れたアフリカ・エチオピアの体験を基にして、現地で撮影した写真を用いて、「国際理解」の項目で指導案を作成し授業を行った。授業をするにあたり、エチオピアの基礎情報等、子どもたちに伝えたいことが多過ぎて、道德というより学活のような授業になってしまった。残念ながら、道德の授業としては決して上手くいったとは言えず、私としてはまた機会があればどこかで、同じ価値項目で授業をしてみたいという後悔が残った。

授業後の研究討議では、グループで話し合う時にホワイトボードを活用したことや、教科化を見据えて評価方法に触れたことなど、評価していただける面があった一方で、案の定、情報量が多過ぎて道德というより学活の授業だったという意見もあった。ただ、批評だけでなく、より良い授業にしていくために今後必要なことを、自分事として考え、代替案を出してくださる先生方や、ねぎらいの言葉をかけてくださる先生方も多く、公開授業の授業者になって良かったと思えた。また、中学部だけでなく小学部の先生方からもたくさんの貴重な意見をいただき、その後の授業展開や指導案作成に大変参考になった。

(2) 学年での道德の取り組み

研修に対して熱心に取り組む先生方の影響を受けながら、赴任2年目を迎え、中学1年生所属となった。2年目は学級担任ではなく、学年主任となったため、道德の授業をする機会は無くなってしまったと思った。しかし、中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科道德編には、「道德科の指導体制を充実するための方策としては、全てを学級担任任せにするのではなく、特に効果的と考えられる場合は、道德科の実際の指導において他の教師などの協力を得ることが考えられる。（中略）また、複数の教職員による学年全体での授業等も考えられる」とある。そこで、年度当初から、「道德は学年の教員全員で取り組む」ことを明確にし、毎時間の道德の授業を分担し、指導案作成から指導案検討までを学年で行うようにした。生徒が学級や学級担任に慣れた2学期からは、副担任も道德の授業者として教室に入るようにした。

学年単位で取り組む研究授業は「道德」を選択し、学年の教員全員で指導案を固めていった。プレ授業後には指導案検討をし、学年全員で取り組んだ。私もプレ授業をする機会をいただいた。

(3) 甥の存在

私には「ゆうひ」という名の甥がいる。一見すると健常者に見える甥は、周りからの理解を得られにくいのが、心

と身体に障がいがあり、かなり特別な支援が必要である。言葉が話すことができず、上手に歩けない。それでも彼は自分ができることを一生懸命やる。自分の気持ちを精一杯伝えようとする。そんな彼を、家族は支えた。しかし外に出ると、彼の行動のせいで、(私も含めて)彼の家族が心を痛めることがよくあった。

私は、札幌市内で勤務していた頃、自分の学級や学年の生徒に彼の話をよくした。「世の中には色々な人がいる」ことや「障がいがあっても、できることを一生懸命やっている」ことを伝えた。その話を通して、生徒たちには自分自身の現状やその先のことについて考え行動してほしいと思ったからである。実際に、甥の話をしてから「自分の考えや行動が変わった」と言ってきた生徒がいたほどである。

(4) 学年道徳の実現

赴任してから一年半が経った頃、熱意あふれる先生方と共に様々な授業を参観していく中で、かなり前から道徳の教材にしたいと考えていた甥のことが、私の中で膨らんできた。道徳の教材にしてみたいと考えながらも、それをしてこなかったのは、自分と甥との距離が近過ぎるため、教材にしたところで、私の自己満足で終わるような内容になるかもしれないと恐れたからである。しかし、上海日本人学校浦東校に勤務し、教育者として成長するための努力を惜しまない先生方に出会ったことで、思いを形にする勇気をいただいた。そして、自分自身が体験したことや自分の思いを込めて実際に指導案を作成することになった。



小学部4年1組での道徳の授業の様子

その指導案を、同じ北海道から派遣されていた先生に見ていただき、アドバイスをいただいた。価値項目から始まり、ねらいや評価、主発問まで意見交換をした。手直しして出来上がった指導案を前に、その先生が「自分の学級(小学部4年生)で授業してみよう」とおっしゃってくださいました。当時、私は中学1年生を担当していたのだが、小学4年生の児童たちを相手に自分の甥の話をするのができました。4年生での授業を終えて、アドバイスをいただいた先生と話をすることで、自分の学年でもできるかもしれないと思うようになった。さらに、授業をするなら学年の1学級だけでなく、全学級で行いたいと考え、学年の先生方に相談した。先に述べたように、私が所属する学年の中には「道徳は学年の全教員で取り組もう」という姿勢が既にあった。よって、学年の先生方の協力も得られ、他にもたくさんの先生方の後押しもあり、中学部1年生を対象に「学年道徳」(教材名：ゆうひくん)を行うことになったのである。

3. 学年道徳の実践

(1) 「他者理解」の道徳の授業

① 授業の中での成果

学年道徳を行うにあたり、普段話し合う機会が少ない他学級の生徒と交流できるように、1つのグループが6～7名となるように学年全体を27のグループに分けた。そして、私自身を除く、学年所属の9名の教師が1人3つのグループを担当し、話し合いの際に生徒の活動の様子を観察したり、生徒の意見を拾ってメモしたりするなど、道徳の評価にもつながるように配置した。

教科化を見据え、独自の読み物資料も作成した。それをスクリーンに映し出し、学年全体が顔を上げて話が聞けるように工夫した。また、読み物資料の中で、始めは甥が言葉が話せないことを隠して読み進めていったことで、子どもたちのその後の心情の変化が読み取りやすかった。さらに、甥がコミュニケーションの手段として実際に使っているマカトンサイン(手話のようなもの)を紹介する際には、甥がマカトンサインで会話している

動画を使った。それにより、生徒は最後まで興味深く教材に向き合うことができたようだった。(学年末に行った道徳の振り返りの中で、「心に残った道徳の授業はどれですか?」という項目に対し、「ゆうひくん」と答えた生徒が多かった。)

小学4年生での授業では、主発問の表現を「自分にはできることが他人にはできないことがあった場合、あなたは どうしますか」に変えて行った。子どもの反応としては、「教えてあげる」という意見がすぐに出たが、甥のケースでは教えてもどうにもならないことが多い。そこで、「教えてもどうにもならないことがあります。あなたは どうしますか」と追加で発問したところ、「できるところまで手伝って、そのあとは見守る」という意見が出た。また、授業の最後には、「親切にすること全てが良い」ことではなく、時には「あえて親切にせず、見守ることも大切だということに気付いた」という子どももいた。

中学1年生での授業では、主発問に対して様々な意見が出たが、1人の男子生徒が「その子を見捨てる」という意見を述べた時には、すぐにたくさんの反論が出て、まるでその場に甥がいるかのように、真剣に考えている様子 がうかがえた。



武道場で行われた中学部1年生の学年道徳の様子

② 課題

授業を行ってみて、私が作ったこの指導案は、恐らく小学校高学年が対象となる内容であったように思う。授業を受けた中学1年生は真剣に考え発表もしていたが、もし発問の内容を変え、資料の内容を変えたら、より深いところで考え、意見を出したように思う。授業後に、見に来てくださった先生方から意見・感想をいただいたが、「中学1年生対象にしては、内容が幼いのではないか」という意見もあった。

指導案に関しては、本時の学習のねらいは「考えることができる」となっていたが、考えて終わりではなく、その後の行動につながるように広がりがあったと思う。実際にその後の行動に変化が見られた生徒もいたので、目標を高くしても良かったと感じた。

他学級の生徒とも交流できるようにグループ分けをし、27ものグループを作った。しかし、中には互いに慣れないメンバー同士が集まり、意見交換が上手くできず、そのグループを担当した教師の力を借りるグループもあった。(逆に、「普段、話し合いをする機会がない友だちと話せて良かった」という子どもの意見もあったが…。)

授業の最後に、私が甥と一緒にいた時の実体験(つらい思いをしたことの1つ)を子どもたちに話した。体験者の話であるから、言葉に重みを増す。もしこの指導案を、他の教員がやったらどうなるのか。甥の存在を知らせた

い、甥のことを通して子どもたちに力を与えたいと考えている私としては、私にしかできない指導案では意味を成さない。

(2) 「国際理解」の道徳の授業

中学部2年生の学年主任となった赴任3年目は、それまでの道徳の授業経験を生かそうと決めていた。前年度同様に、学年の教員全員が道徳の授業案を用意し、検討して進める形をとった。私自身は、私が赴任1年目の研究授業で行った「国際理解」の指導案をアレンジし、学年道徳として再び授業をするつもりで考えていた。しかし、3学期に予定していた学年道徳の授業は、学校自体がCOVID-19によって休校となり、幻となってしまった。

4. 最後に

「自分の甥のことを題材にした道徳の授業をしてみたい」という私の願いは、チャンスやタイミングが上手く絡み合い、応援してくださる方々がたくさんいたことで実現させることができた。普段からよりよい教育を実践しようと互いに切磋琢磨する同僚がいたからこそ、今回のような貴重な機会をいただけたのだと思う。また、普段から教育について熱く語れる仲間がいたからこそ、勇気を出して挑戦できたのだと思う。

上海日本人学校で過ごした3年間は私にとってかけがえのない時間となった。素晴らしい出会いと、このような貴重な研修の機会をいただけたことに心から感謝している。これからも更なる高みを目指して、上海での経験を今後の教育活動に生かしていきたい。